僕と姫路さんと誕生日

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と姫路さんと誕生日

【Ｎコード】
Ｎ２８９８Ｚ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
瑞希の誕生日記念連載短編！
毎日１話ずつ更新していきます。

数年越しの誕生日（前書き）

瑞希誕生日記念小説！
タグのＣＰ情報をよくお確かめの上お読みください。
なお、今までの短編と少しだけリンクしております。

数年越しの誕生日

明久ＳＩＤＥ

『今日の放課後、私の家で待ってます』

僕の持つ便箋には丁寧な字で、そう書いてあった。

「うーん……」

結局、差出人のわからないまま朝のＨＲを終えてしまった僕は自分の席で考えに耽っていた。朝、靴箱に入っていたあの手紙。

いったい、差出人は誰だろうか？

普通、手紙には差出人の名前が書いてあるものだが、それすら書いてなかったのだ。きっと、これを書いた人はどこか抜けている人なのだろう。

「どうしたんだ明久？」

頭を抱えて考えている僕を見下ろすようなかたちで雄二が尋ねてくる。

「いや、大したことじゃないからいいよ」

雄二にあの手紙を知られたら、いつぞやの二の舞になりかねない。そうすれば、異端審問会に追われ続けて僕の計画も台無しになってしまうだろう。そう思い、雄二を適当にあしらっておく。

「明久、なにを隠してるんだ？」

「いやだなぁ、僕が雄二に隠し事なんかするわけないじゃないか」

「じゃあ、お前の胸ポケットから見えてるそれはなんだ？」

「えっ！？」

雄二に指摘され、とっさに胸ポケットに手を当てる。しかし、僕の手はなににも触れることはなかった。それもそうだろう。なんたって、こういう状況を危惧してあらかじめ手紙はカバンの中に……

「雄二、おねがいだから誰にも言わないでぇぇぇ」

ようやく、自分がはめられたことに気づいた僕は必死に雄二に泣きつく。

「うわっ！？

やめろ明久！離れろって！」

「誰にも言わないって約束してくれる？」

「するから離れろ！

こんなところ翔子に見つかったらなにされるかわからねぇんだよ！」

たしかに僕に危害を加えない雄二が痛い目にあうのはしのびない。

そう思い、雄二が離れると廊下に連れていく。

その時、一瞬姫路さんと目があった気がしたのは気のせいだろうか？

「で、結局なにがあったんだ？」

「実を言うとこれなんだ」

周りに誰もいないことを確認すると、雄二にそっと手紙を見せる。

「なるほどな……」

その手紙を見た雄二はなにか察しがついたようだ。

「もしかして差出人がわかったの？」

「逆にお前はわかんないのかよ……」

どういうわけだか雄二に呆れられてしまった。

一応、僕だって心当たりがないわけではない。

ないわけではないのだが、僕だけが呼ばれるなんてありえる筈がないんだ…

「そんなこと言われたってわかんないよ…」
だから僕は自分が傷つかないようにと…
現実を叩きつられた自分が傷つかないようにと嘘をつく。
「そう…か……
なら、下手に詮索しなくてもいいんじゃないか？
どうせ、お前は今日用事があるんだろ？」
雄二が僕を試すように言ってくる。それにしても――――
「なんで知ってるのさ……」
「伊達に一年以上、お前とつるんでねぇよ」
どうやら、一年以上僕と関わると考えていることがバレてしまうらしい。
これはまずい……
三年生になる頃には僕はクラスの誰にも嘘をつけないことになってしまう。
そうなれば、僕の抱き続けていた『想い』もみんなにバレてしまい、冷やかされ、しまいには姫路さんにもバレてしまうだろう……
「雄二…
いっそのこと、僕を殺してくれないかな……」
「どうしてその結論に至るんだよ…」
「だって三年生になる頃には隠したいことも全部筒抜けだなんて堪えられないよ！」

ならいっそ、姫路さんに知られて軽蔑の眼差しを向けられる前に死んだ方がマシだ。

「落ち着け明久！
なにも一年間、お前と過ごしたからって筒抜けになるわけじゃない。
単純にお前がわかりやすい性格してるっていいたいだけだ」

「どっちにしたって大差ないじゃないか！」

「いや、大ありだ。考えてみろ。
小学生からの付き合いの姫路にお前のことが筒抜けになってるか？」

「……た、たしかに…」

雄二の言う通り、このクラスで一番付き合いの長い姫路さんに隠したいことは大方隠し通せている。たまに核心をつかれてドキッとさせられることもあるが、それでも本当に隠し通したいことは未だにバレていない……と思いたい…
そして今、僕が隠していることもおそらくバレていないだろう。

「まぁ、安心しろ。
お前がヘマしないかぎり須川たちにバレるようなことはないからよ」

「普段通りでいろってことだね」

「まっ、そういうこった。今日くらいちゃんとやれよ」

そう言う雄二はなんだか嬉しそうだった。もしかしたら、僕が今日誰になにをしようとしているのか気付いているのかもしれない。

いや、それどころか結末すらも知っているのかもしれない……

「ありがとう…雄二……
もちろん、ちゃんとやってみせるさ。今日くらいはね」

そう言うと僕は一足先に教室に戻っていった。
今まで一度も祝ってあげられなかった誕生日。
今日はその日だから……
今年こそは祝ってあげたかった。僕の大切な人である君の誕生日を。

～放課後～

あれから下手に手紙のことを詮索しなかったのが功を奏したのか、
異端審問会の面々に捕まることもなく今を迎えられた。
あとは今からプレゼントを買って目的の場所へと向かうだけである。
はやる気持ちを抑え、帰りのＨＲが終了するのを待つ。

「以上でＨＲを終了する！」

鉄人の声がこんなにも嬉しいと思ったことはない。
そう思いながらカバンに荷物を詰めた僕は一目散に出口へと向かう。
しかし、そんな僕よりも早く出口へ向かう影が一つ……

「……行かせない」

ムッツリーニが出口を塞ぎながら言う。
くっ…
さすがムッツリーニ…
僕の異変に気づいていたか。
「ムッツリーニ、どいてくれないかな？」
なるべく平然を装いながら言う。
ここで強行突破をはかろうものならば、須川君たちも異変に気付き
間違いなく僕は捕まってしまうだろう。
その反面、ムッツリーニだけならばなんとかできないわけではない。
「……お前の幸せなど認めない」
さすがFクラスの一員…
動機が他人の幸せの阻止とは腐った根性だ。
「じゃあ、取引をしようよムッツリーニ」
「……話だけは聞いてやろう」
よしっ、のってきた！
「みんなには聞かせれない話だから耳かして」
「なんだ？」
「（実を言うと、今日工藤さんスパッツ穿いてないらしいよ）」
「（な、なんだと！？）」

もちろん、そんな話はない。嘘八百である。
しかし、ムッツリーニが必至に鼻血を我慢しているのを見るかぎり効果はあったとみてよいだろう。あともう一押しだ！

「（それでムッツリーニに見せたいんだってさ）」

「（任せろ！）」

いったい何を任せたらいいかわからないが、ムッツリーニは大急ぎでAクラスへと向かっていった。もちろん、鼻血を大量に流しながら……
まぁ、なにはともあれこれで一難さったわけだ。
だけど、世の中というのはそう上手くいくものではなく――――

「吉井、いったいムッツリーニになにを吹き込んだんだ？」

「須川君……」

くそっ…
さっきのムッツリーニの動きで勘づかれたか……？

「な、なんでもないよ」

「なら、俺たちと少し話し合おうぜ。異端者について話があるんだ」

「そ、それは…」

ここで言う異端者とは十中八九、僕のことを示しているだろう。
そして、須川君に着いていったら最期、異端審問会に処刑されるこ

と間違いなしだ。

「どうした？
まさか異端審問会の一員である吉井が参加できないってことはないよな？
それとも、異端審問会を差し置いてでも優先しなくちゃいけないことでもあるのか？」

「えっと……」

まずい…
早くこたえなければ、僕を怪しんで異端審問会のメンバーが集まってしまう。
なにかいい手は――――
そう思い、周りを見回すがＦクラスに僕を助けてくれそうな人はいない。
頼みの綱である姫路さんは委員会の仕事でＨＲ前からいないし、秀吉はもう部活に行ってしまっている……
かと言って美波に頼るのはリスクが大きすぎる……
後は雄二だけが頼りだが、こういう時の雄二は役にたたない。
いや、むしろ僕を陥れようとさえしてくるだろう…

「さてと翔子のところにでも行ってくるか」

だからこそ、雄二のわざとらしく大きな声で言ったことが信じられなかった。

「なに！？
坂本、貴様異端者だな！」

「そんなこん知るかよ！
他人に怯えながら自分のしたいことができないなんてバカらしいんだよ！」
その言葉はまるで僕に向けられているようだった…
「「「「異端者には死を！！」」」」
「上等だかかってきやがれ！」
異端審問会のメンバー囲まれた雄二が吠えるように叫ぶ。
それは雄二から離れている僕ですら威圧される迫力があった。
「アキ、なにボーッとしてるのよ！あんたはささっと行きなさい」
「でも雄二が！」
「あんたも坂本のやりたいことがわからないほどバカじゃないでしょ？」
それくらい僕にだってわかる…
雄二が僕のために……僕が姫路さんの誕生日を祝ってあげられるように犠牲になってくれたことくらいは……
「大丈夫、あんたのことはウチが適当にはぐらかしとくから。
それにウチだって、これでも女の子よ。
ウチが言えば坂本だって解放してもらえるわ」
「ありがとう……美波…雄二」

本当にありがとう…
僕のわがままなんかに付き合ってくれて。
「お礼は全部終わってからにしなさい。
それよりもちゃんと祝ってあげてね、アキ」
「うん！」
僕は一度雄二の目線をかわすと教室を飛び出していった。
（がんばれよ明久…）

数年越しの誕生日（後書き）

次回は本日の１２：００に更新予定です！

僕と姫路さんと二人だけの誕生日（前書き）

今回の話は原作６巻、またはアニメ２期最終話をご覧のうえ、読んでくださるとなお楽しめるかと思います。

僕と姫路さんと二人だけの誕生日

明久ＳＩＤＥ

「どれにしようかな…？」

雄二と美波の助けもあり、無事に教室を抜け出すことのできた僕はデパートのプレゼントコーナーに来ていた。
クリスマス間近ということもあり、ネックレスのような高価なものから小学生がプレゼント交換に使うような文具セットまでと様々なものが陳列されている。

しかし、今の僕の財布の残金は２０００円。
残念ながら、あまりこったものを買うことはできないのが現状だ。

そんなことを考えながらデパートの中を回っていると、あるものが目に止まる。
それは、女性用のサンタのコスチュームだ。暖かそうな服とは対照的にスカートの方は短くなっており、太ももの辺りもバッチリと見える仕様である。
姫路さんがこれを着てくれたら似合うだろうし、なにより――――まずい……
鼻血でそう……

「お客様、大丈夫でしょうか？」

鼻血をおさえるために鼻をおさえてる僕の体調が悪いと勘違いしたのか、店員さんがたずねてくる。

「あっ、いえ、大丈夫です。本当に…」
だから僕に構わず仕事を続けてください。変態と思われたくないんで……
なんて言えるはずもない僕は適当に繕い、その場をやり過ごそうとする。
「もしかして無くし物でしょうか？」
「違います」
下向いてるのはなにかを探してる訳じゃないからね！
「では、なにか商品をお探しで？」
「それも違うから大丈夫です」
実際は姫路さんへの誕生日プレゼントを探しているのだが、この店員には店内を案内されたくない。そう思い、断っておく。
「ではやはり、ご気分が優れないのでしょうか？」
「だから大丈夫だって言ってるじゃないですか！」
店員のあまりのしつこさに、つい顔をあげて怒鳴ってしまった。
当然、自身の手という堤防を失った鼻血は大氾濫をおこし、床に――――あれ？
足元の床を見るが、僕の予想に反して汚れは一つとしてなかった。
ただ、目の前の店員さんが僕の顔をさっきからまじまじと見ている

のだ。

「あのぅ……僕の顔になにかついてますか？」

「血がついてます。それも鼻を中心に」

まるで待ってましたと言わんばかりに即答する店員。
要するにあれだ。手で鼻血をおさえていたのはいいが、そこで鼻血が固まってしまい、顔にこびりついたということだろう。
結果的に固まった鼻血が堤防の代わりになり、店内の床を汚すことはなかったが、文字通り面汚しである……

「失礼しました！」

その場から逃げ出したい一心で僕は顔を下げ、近くのトイレへと駆け込んだ。

～数分後～

「ふぅ…」

洗面で鼻血をきれいさっぱり落とした僕は一息つく。
それにしても、さすがは姫路さんだ。目の前にいないのに僕を悩殺するなんて…

テンッテッテテーテンテッテテー♪

そんなことを考えていると僕の携帯の受信音がなる。
マナーモードにするのを忘れていたことは見逃してほしい。
ところで、この受信音がなにかわかった人って何人いるんだろうか？
まぁ、なにはともあれ誰かからメールがきたらしいから受信ボックスを開く。

『ｆｒｏｍ　雄二
お前の自滅を姫路のせいにするな！
それはそうと、誕生日プレゼント決まったか？』

とりあえず前半部分は無視しよう。
どうせまた、僕のことを単純だのなんだのってののしるだろうし…

『ｔｏ　雄二
まだ決まってないんだ。２０００円以内でいい案ある？』

「これでよしっと」

僕は送信ボタンを押すと――――テンッテッテテーテンテッテテー♪
返信はやっ！？
というか、まだ送信ボタン押したばかりだから届いてないよね！？

『ｆｒｏｍ　雄二
どうせ明久のことだから１０００円しか残ってないって言うんだろ？
あと、ちゃんと前半部分についての返信もしろよな』

ふっ…
甘かったね雄二。
僕は姫路さんの誕生日に備えて２０００円も貯めていたのさ。
いや、こういう場合は２０００しかと言うべきなのだろうか？

しかし、今回は無駄遣いしたわけではない！
あれから（私と明久君とある日の昼下がり参照）姫路さんと何度もショッピングに行き、その度にちょくちょく出費がかさんで残金が少ないだけなんだからね。
断じて言おう。無駄遣いではないと！

テンッテッテテーテンテッテテー♪

いい加減、マナーモードにしておこう…
そう思い、マナーモードにした後に再度受信ボックスを開く。

『ｆｒｏｍ　雄二
無駄遣いじゃないことは認めてやる。
俗に言う必要経費ってやつだな。
で、提案なんだが夏物の服とか安売りしてるんじゃないか？』

たしかに今日は姫路さんの誕生日である１２／２１なのだから冬である。
当然、冬ならば在庫処分として夏物の服は安売りされているだろう。
しかし、誕生日にバーゲン品とはなんとも華に欠けるというものだ。

『ｔｏ　雄二
着用品っていう案だけはもらっておくよ。ありがとう』

内容を確認して送信ボタンを押す。
これ以上は雄二に助言を求めても仕方ないから他の人に聞こう。
やっぱり、女の子にあげるものだから女の子に聞くのが一番だよね。

『ｔｏ　秀吉&美波
誕生日になにをもらうと嬉しいかな？』

送信してしばらく待つとバイブ音が鳴る。
やっぱり、公共の場ではマナーモードにしなきゃだよね。

『ｆｒｏｍ　美波
なんでウチよりも先に木下が選択されてるかはおいといてあげるわ。
そうね……単純にアキがあげたいものでいいんじゃないの？
下手に凝ったものや、高いものあげても瑞希に気を遣わせちゃうだけだろうし』

なるほど、たしかに美波の意見も一理あるだろう。
さすがは女の子といったところだろうか？
おっと、次は秀吉からのメールだね。

『ｆｒｏｍ　秀吉
そうじゃのぅ……
やはり、貰って嬉しいものと言ったら真心のこもっておるものじゃろう。
なにも手作りでなくても、明久の喜んでほしいという気持ちが伝われば、それでいいと思うのじゃ』

さすがは美少女の秀吉。
真心とか考える時点で、どう考えても女の子の思考回路だと思う。
さて、三人の意見を統合すると『僕が姫路さんに渡したくて、なおかつ真心が伝わるような着用品』ということになる。
そして、ちょうど目の前にはその条件にあいそうなものが置いてあった。

『ｔｏ　雄二&美波&秀吉
ありがとう。おかげでいい贈り物が見つかったよ』

そう返信すると、ちょうど近くにいた店員を呼び止める。

「すみませーん、これ包装してもらってもいいですか？」

～更に数分後～

僕はさっきデパートで買ったマフラーの入った紙袋を手に提げながら、姫路さんの家へと向かっていた。

「うぅ、寒い……」

まさかデパートが出たら雪が降っているなんて思わなかったよ……

制服も結構厚い素材だが、それでも相当寒い。

なにより、デパートの中は暖房が効いていたため、なおさら寒く感じるのだ。

でも、これだけ寒かったら姫路さんもマフラーを喜んで受け取ってくれるよね。

そう自分を奮い立たせて僕は雪の積もる道を歩いていく。

「ハクション！」

うぅ、鼻水まで出てきた…

それに寒い筈なのに、なぜだか身体が熱い。

けど、頑張らなきゃ……

あともう少しで姫路さんの家なんだから…あと…もう少しで……ほら…そこ……の…角を……曲がれば……

バタンッ

立っていることすら辛くなって、僕はその場に倒れてしまう。
積もった雪が火照った身体にきもちよく馴染む。

おかしいなぁ……
立ち上がろうとしても、ちっとも身体に力がはいらないや……
あと…もう少しで……姫路さんの家だってのに…情けないよね……
……

サクッサクッサクッサク

誰かが積もった雪の上を歩いて来る音が聞こえる。
できれば姫路さんの家まで肩を貸してほしいと頼みたいけど、あいにく顔を上げるだけの力すら残っていない。

ごめん…姫路さん……

「ん……」

目が覚めると、そこはどこかの室内だった。
そして僕はその部屋のベットに寝ているらしい。
誰かが助けてくれたのだろうか？
氷枕に湿らしたタオルが額に添えられていることを考えると悪意をもった相手ではないことがわかる。

ガチャッ

「気がつきましたか？」

「姫路さん…どうして……」

扉を開けて部屋に入ってきた姫路さんに弱々しくもたずねる。

「どうしてもなにも、ここは私の家ですよ？」

「そう…なんだ…」

室内を見渡せば、純白のカーテンに綺麗に並べられた参考書や小説。
たしかに姫路さんの家と言われれば納得の内装である。

「ということは、ここは姫路さんの部屋…？」

「そうですよ」

姫路さんが額のタオルを新たに持ってきたタオルと取り替えながら言う。

どうやら僕は謀らずしも姫路さんの部屋に初入室したらしい。

「ありがとう、姫路さん」

「私の方こそありがとうございますね、明久君♪」

「？？？」

「これのことですよ」

そう言って、姫路さんはテーブルに置かれている紙袋を指差しながら微笑む。

「お誕生日おめでとう…姫路さん」

「ありがとうございますね」

やっと祝ってあげれた姫路さんの誕生日。それは僕の願いだった。
だけど今、僕の願いが叶えられたことで姫路さんに笑顔がうまれた。
これって、幸せを共有できてるってことだよね…？

「開けてみてよ」

だから、姫路さんの笑顔がもっと見たくて…
姫路さんと今以上に幸せを共有したくて開封を促した。

「では、お言葉に甘えて」

ビリッ

姫路さんが若干焦りながらも包装紙のテープをはがしていく。
焦ってるってことは、少しは期待してくれてるってことかな…？

「わぁ……
温かそうなマフラーですね」

取り出したマフラーを手に持ちながら嬉しそうに姫路さんは言う。

「気に入ってもらえたみたいでよかったよ」

「はいっ！
このマフラー、大切にしますね」

マフラーを広げては抱き締めるように両手で抱え込むといった動作を繰り返すところを見ると、本当に気に入ってもらえたようである。

「でも今、このマフラーが必要なのは明久君ですね」

そう言うと突然、姫路さんはしゃがみこみ、横たわっている僕の首にマフラーを巻いてきた。

「熱があるなら少しでも温かくしてないといけませんよ」

僕の耳元で姫路さんが囁くように言う。
そうか、僕は熱があるのか…
おそらく、雪の中歩いていて身体が冷えたのが原因なのだろうが、
姫路さんには本当に迷惑かけちゃったな……ん？
待てよ。僕をここまで運んでくれたのは誰だ？

「姫路さん、ちょっといい？」

「どうしましたか？」

「いや、僕をここまで運んでくれたのは誰なのかと思ってさ」

「明久君を運んでくれたのは私のお父さんですよ」

よかった…

まさかだけど、姫路さんが僕をおぶったんじゃないかと思ってひやひやしたよ…

女の子におぶられる男なんて惨めなことこの上ないからね。

「それにしても驚きましたよ。

明久君を玄関先で待ってたら何かが倒れる音がしたので行ってみると明久君が倒れてるんですから…」

ということは姫路さんが僕の第一発見者ということだろう。

それは必然的にあの足音の主も姫路さんだということを意味する。

だけど、それ以上に重大な事実がそこにはあった。

「僕を待ってたって…」

「とぼけないでください…

靴箱にいれておいた手紙、見てくれましたよね？」

「えっ、それって…」

別に姫路さんからの手紙だという可能性を考えなかったわけではない。

しかし、僕だけが手紙を貰う訳が……僕だけが呼ばれる訳がないと

思ったのだ。
だから、その可能性を考えないようにした。
考えてしまえば、そこにあるのは残酷な現実だけなのだから…
そう考えていたのに違った……
僕は……僕だけが姫路さんに呼ばれていたのだ。
誕生日という、この大切な日に。

「ありがとう……姫路さん…」

横向きで寝ているため、左目から流れた涙が右目にしみる。

「明久君、どうして泣いてるんですか？
もしかしてどこか痛んだり、悪いところでもあるんじゃ……」

「違うよ姫路さん。
僕が勝手に悩んで勝手に喜んでいるだけなんだ」

そう、君に近づけたことが嬉しかったんだ…

「よくわかりませんけど、体調が悪いわけじゃないんですね？」

「姫路さんが看病してくれてるんだから悪いところなんてあるわけないよ」

それだけを言うと途端に眠気が襲ってきた。
ダメだ……
ここを逃したら、僕と姫路さんはいつもの距離に戻ってしまう……
言わなきゃ…
距離が僅かにでも近づいている今に…

姫路さんが僕だけを呼んでくれた今という瞬間に……

「姫路さん…僕は……」

ぎゅ

全てを言い終わる前に姫路さんが僕の左手を両手で優しく握りしめてきた。

火照っているはずの身体でも充分に感じ取れる温もり。
小さく、儚い、僕の護りたいと思った手。
その温もりに……優しさに僕は今、救われているんだ。

「無理…しないでください明久君」

心配そうな、だけれど僕に不安を与えまいと微笑む姫路さんを見て、僕は建前や自分に対する嘘をすべて投げ出してしまいそうになった。
いや、事実投げ出していたのだろう。

「ありがとう…瑞希」

そう、何年ぶりかになる彼女の名前を読んでしまうほどに…

瑞希ＳＩＤＥ

「無理…しないでください明久君」

明久君の言おうとしていたことの続きを聞きたくないと言ったら嘘になります。
ですけど、今はそれ以上に明久君のことが心配なんです。
私の誕生日を祝うために熱を出してでもやって来てくれた優しい明久君のことが心配なんです。
手紙の意図を理解していないとしても、ちゃんと私の元にやって来てくれた明久君のことが誰よりも大切だから……
これ以上、明久君に辛い思いをさせたくないんです。

「ありがとう…瑞希」

「ふぇ！？」

今、明久君は私のことを『瑞希』って……
いつものように『姫路さん』じゃなくて瑞希って……
聞き間違えではなく、はっきりと聞こえました。
明久君に名前を呼ばれるなんて小学生以来です…

心臓が早鐘のように波打っているのがわかります…
緊張ではない。だけど、それに似た心地よさ。
それは明久君だけが与えてくれるもの。
……最高の誕生日プレゼントをありがとうございます。だけどやっぱり――――――

「本当に明久君はずるいですね」

いつも不意打ちばかりで…
私がどれだけ明久君のことを意識しているかもしらないで……
だから私もずるくしちゃいます。

「私が明久君の病気をもらってあげますね」

そんな言い訳をして私はちょっとずるく、誰よりも優しい彼にそっと口づけた。

これからもそばにいさせてくださいね。明久君

僕と姫路さんと二人だけの誕生日（後書き）

瑞希の誕生日記念短編いかがだったでしょうか？
最後はちょっと強引だった気がしますが、見逃してください……
明久に『瑞希』って呼ばせたかったんです。
そして明日はムッツリーニ＆愛子のターン！！
次回もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2898z/

僕と姫路さんと誕生日

2011年12月21日12時48分発行